論　文

# 地域再生への仕掛けと多様な交換形態の発生
## 「被災農地にオリーブの森を！」プロジェクト再考

川床　靖子（大東文化大学名誉教授）

# Various exchanges that lead to the re-creation of community: Rethinking 'growing olive forest' project in tsunami-affected farmland

Yasuko KAWATOKO

### はじめに

2000年代に入り、活動理論家のエンゲストロム（Engeström,Y. 2009）や状況的認知論者の上野（2011）は、現代の社会的状況を「野火的活動」が拡大している時代だと表現した。野火的活動とは、「分散的でローカルな活動やコミュニティが、野火のように、様々な場所で同時に形成され、広がり、しかも相互につながりを持って展開されていく活動（上野 2011 p.399）」を指している。2011年3月11日の東日本大震災以後の市民による地域再生のための連携活動に見られるように、野火的活動は制度的な機構の境界を超えて拡大している。そして、社会の中に商品経済の枠組みを外れた新しい労働や知識の交換形態を産み出している。

本研究は、大震災の津波で大きな被害を被った宮城県東松島市の農家（農業法人）、Yファームの震災後の実践を追跡調査するものである。Yファームは震災によって断ち切られてしまった人と人、人とモノとのつながりを新たに作り直すことを通して新しい農業の展開を目指している。Yファームは、津波で全てを流され殺風景になってしまった農地にオリーブの森をつくることを計画し、資金の調達を含めてその実現へのプロセスに多くの人的、物的資源を巻き込み、景観のみならず地域全体の農業の再生を目指して活動を行っている。見方を変えると、Yファームの農業実践は、現代の野火的活動に特徴的な新たな出会いと交換の可能性を探るネットワーク実践とみることもできる。彼らはクラウドファンディングを利用して資金と人々の関心を集約し、フェイスブックなどSNSを駆使して自らの活動を可視化、表現すると共に、新たな知識、情報、そして、人々の共感の交換、並びに、資金の循環を創り出そうとしている。

上野（2011）は野火的活動における人々のつながりを吟味する上で重要なことは、つながりのあり方、つまり、そこにどのような「交換」（柄谷 2003）が生まれているのかを見ることだという。

そこには、お金とモノの交換、即ち、商品交換に還元することのできない様々な知識、労働、感情の交換、たとえば、専門的な知識のみならず日常知り得た知識の交換、手助けやスキルの交換、さらにはその活動集団への帰属性やアイデンティティの感覚の交換などが生まれている。上野が指摘するように、「交換」という概念を人々の活動の分析に導入することによって野火的活動の成立と変化の過程を直線的ではなく多面的に、鳥瞰的ではなく状況的に記述することが可能になるかもしれない。但し、人々、コミュニティ、そして、その活動空間に登場する様々な人工物の間の「交換」の形態を明らかにするためには、その活動をめぐる社会・技術的アレンジメント、即ち、人、モノ、装置の配置のあり方がどのように形成され、かつ、活動の進展に伴ってどのように変化していくのかを具体的に見ることが必要であろう。以上の仮定のもとに、本論文は、Yファームによる新しいかたちでの農業実践を分析、記述し、その実践の可能性を探るものである。

## 1. ハイブリッドな集合体による農業実践

### 法人化と新しい形の農業

Yファームの代表、Aさんの農地は仙台湾を望む東松島市牛網地区（U地区）の海岸から約1.5 kmの地点にある。2011年の大震災では、時速200 kmに及ぶ津波がこのU地区にも押し寄せ、海沿いの住宅および農地と作物の殆ど全てが流されてしまった。今年42歳のAさんは震災以前からU地区で農業を営んでいる。農業法人を立ち上げたのは震災後の2012年11月のことである。近隣の被災農家が離農して土地を去り、周りに耕作放棄地が日に日に増えていく状況を目の当たりにしての決断だった。かつて、作物が青々と成長していた広大な農地を荒れるがままに放置しておくわけにはいかない、そのためには、自らの営農活動だけではなく被災に打ちのめされている地域全体の農業を再生させなければならない。Aさんは同じ想いを持つ仲間、営農ボランティアやボランティア企業の人々と話し合いを重ねるうちに、震災前と同じやり方ではなく“新しい形の農業”で地域の再生に挑戦してみようとの考えに至ったという。こうした経緯で、Aさんは農業に関わる様々な実践、たとえば、個人や企業ボランティアの継続的な受け入れ体制の構築、食と農業体験のイベントの定期的な開催、小・中学生を対象とした農業実習体験の受け入れ、学生団体との野菜のブランド化プロジェクトの実施等々を組織しやすい法人化（株式会社化）の道を選択したのである。

Aさんらの目指す“新しい形の農業”とはどのようなことを指しているのだろうか。これを理解するには、大震災による津波で人、モノ、装置（営農の基盤）の全てが流されてしまったことを前提に考える必要があるだろう。震災当時（今から5年前）、30歳代の人で農業を続けることを選択したのはU地区ではAさんだけだったという。他の人々は農業を捨ててこの地を去った。大地は残ってもそこを耕す人、食物を生産することに関心を持つことのできる人、そして、農業生産活動を支援する人がいなければ、農業の再生、ひいては農業による地域の再生は望むべくもない。身を以てそのことを実感したAさんは、農業実践をめぐる社会・技術的アレンジメント（人、モノ、装置の布置）の大胆な再構築へと進みはじめる。

Aさんが設立した農業生産法人、株式会社Yファームは、常時、正社員2人、契約社員4人、加えて繁忙期には臨時職員を雇用して運営されている。米、露地野菜、ハウストマトの栽培と販売を軸に、震災後、東松島市から被災住宅の跡地を借り受け、種苗会社や緑化企業と連携して芝生と野菜苗の栽培を始めている。2015年の秋には、S林業（事業者）が東松島市に新しい産業の創出として提案した「希望の芝プロジェクト」が始動した。津波の被害を受けた土地を芝の生産地として新たに生まれ変わらせることをめざす事業である。Yファームはこの事業の協力生産者として参加している。塩害を受けた土地での試験栽培を経て芝は順調に育ち、2016年の6月には地元の小学校の校庭に芝生貼りを施工した。Aさんは「Yファーム初の（プチ）公共事業、無事完了できました。校庭芝生化への第一歩、子供たちが芝生の上で走り回ったり、寝転がったりする姿が目に浮かびます」とフェイスブック（FB）に綴っている。

また、Yファームは、地域の小・中学生の農園作りのサポートや高校生インターンシッププログラムのサポーター企業として農業に関心を持つ若い人の受け入れや就農への意識づけにも力を注いでいる。Yファームの圃場では、東北大学や東北学院大学など地元の学生団体による東松島野菜のブランド化プロジェクトも進行しており、学生たちが週末、農作業に従事する姿を見ることができる。この「みんなで作ろう！東松島野菜プロジェクト」は、農家、地元、学生、ボランティアが協働で東松島限定の野菜（地野菜）を栽培し、その野菜を使った加工品などを開発して全国に売り出すことを計画している。このプロジェクトは2013年から始まり、東松島の土地や気候に合った野菜を見極めるべく、約30種類の野菜を栽培している。消費者に“珍しい！”と手にとってもらえる野菜を選定するなど、学生たちの視点で野菜づくりを行い、Aさんら農家のアドバイスを受けながら週末の農作業と販売促進（ブランディング）を学生たちが担っている。

AさんらYファームによるこのような‘新しいかたちの農業’は、従来の典型的な営農スタイルとは大分異なるように見える。日本の多くの農家で続けられてきた農業、つまり、農家が家族単位で農作物を生産し主に農協や産直市場を通じて市場に流通させるという農業とは、農作業の主体も、生産品も、消費者も、市場も、販売ルートも、農業技術とその学習のあり方も異なっている。カロン（Callon, M. 2004）の言葉を借りるならば、ハイブリッド（異種混淆）な（人間および非人間物の）集合体による農業実践ということになるだろうか。AさんらYファームがめざす新しいかたちの農業、言い換えれば、農業実践をめぐる新しい社会・技術的アレンジメントの形成には多くの人々、グループ、そして、人間だけではなく数々の非人間物が参加している。たとえば、Aさんをはじめとする Yファームの人々、地域の被災農家、耕作放棄地、芝や野菜の種苗会社や震災復興支援企業、行政機関（東松島市）、地域の小・中学生、農業に関心を持つ高校生や大学生、露地野菜や地野菜、地域支援活動団体、ボランティア団体、FBなど情報コミュニケーション技術の使用により被災地農業に関心を向ける人々、そして、何よりも津波で全てを流されてしまった広大な大地など。この集合体の活動は新しい社会・技術的アレンジメントの形成と共に進展し、このアレンジメントの参加者は人やモノとの様々な形の「交換」を通して多様なエージェンシー（新しいアイディアや要求、期待を抱くこと）を形成する。こうした新たなエージェンシーはこの集合体をめぐる社会・技術的

アレンジメントの変化と再編を生み出し、それに伴って、この集合体の活動もまた新たな段階へと進む。

## 2. 新たな出会い、新たな交換の可能性を探るネットワーク実践としての「オリーブの森」プロジェクト

Yファームは、津波による塩害で樹木が減り、風当たりが強く、殺風景になってしまった東松島市に、きれいな農地、環境、そして、景観を取り戻すための活動を少しずつ進めてきた。農村と農村以外の土地に住む人々が交流し、誰でも気軽に農作業や四季折々の農村風景を楽しむことのできる空間づくりをめざしている。震災から5年を経た今、その一環として、Yファームは人々がこの地域に集まるための拠点となる「オリーブの森」の造成を計画している。Aさんは、2年前から景観づくりにプラスして様々な活用が期待されるオリーブに着目し、検討を始めていた。2016年に、移転跡地の農地としての借り受けが正式に可能となり、オリーブ栽培のスタートを切ることになった。オリーブの森づくりについては、福島県いわき市で震災以降「復興のシンボルとしてオリーブを植えよう」を旗印に苗木づくりと栽培が進められていることにも大きな刺激を受けたという。

いわき市では震災以前から増え続ける耕作放棄地を農地として活用するために、任意団体のオリーブプロジェクト研究会などが気候、土壌環境の異なる市内各地に種類の違うオリーブの定植、育苗栽培することで、いわきの気候風土に最適な品種の研究をしてきた。震災直後、いわきのオリーブプロジェクトは全国からの支援を受けて活動を再開し、現在では市内30箇所にオリーブ栽培の耕地を広げている。同研究会の理事長・松崎康弘氏はプロジェクトを続けることへの思いを次のように語っている：「作っても風評被害で売れない、もう高齢だから農業は諦める、と3.11以後に農業を辞めた人も多いです。幸い、いわきは放射能が殆ど基準値内で、多くは検出されていませんが、放射能はこれからもずっと測定し続け安全を確認していかなければならない問題です。だからこそ今、オリーブ栽培を始めておけば、次の世代に希望をつないでいける。そんな願いを込めてプロジェクトを続けています（http://iwaki-olive.com/）」と。このプロジェクトには農業、加工業、流通業、そして、他の様々な職種のメンバーが参加している。将来的には、オリーブの栽培のみならずオリーブオイルの生産など加工商品の開発とそれらを地域ブランドとして流通させていくこと、言い換えれば、農工商の連携（1+2+3）による6次産業化をめざしている。

Yファームの地元、東松島市のU地区は冬季でもマイナス15度以下の気温にはならず、雪が少なく、乾燥した気候と水はけのよい砂地という気候風土がいわき市と似ており、オリーブを育てるための条件が揃っている。このことから東松島市でもオリーブの栽培が可能であろうという見込みのもと、YファームはU地区に日本最北となるオリーブの森をつくることを計画した。

### クラウドファンディングを活用した「オリーブの森」プロジェクト

このプロジェクトの正式名称は「津波で流された土地に日本最北のオリーブの森をつくり、農業

で地域を再生させたい」である。Yファームはプロジェクトを実行するための資金調達方法として、復興支援企業である某旅行社の助言などもあり、クラウドファンディングの活用を選択した。朝日新聞社によるクラウドファンディングのサイト「A-port」の‘コミュニティ’部門にアプライして審査を通過し、2016年2月に資金調達とネット上でのPRがスタートした。資金調達の目標金額は、オリーブの苗木の購入、畑の造成、オリーブの木の育成に必要な肥料代、防風ネットの製作などに必要な85万円であった。

クラウドファンディング（Crowd + Funding, 大勢の人々 + 資金調達）とは、「こんなモノやサービスを作りたい」「世の中の問題をこんなふうに解決したい」といったアイディアやプロジェクトを持つ人が専用のインターネットサイトを通じて世の中に呼びかけ、共感した人から広く資金を集める方法である（https://a-port.asahi.com より）。クラウドファンディングは人と人との関係を活用した新しい交換（資金調達と返礼）の仕組みと言えるが、資金と支援者へのリターンのあり方によって、寄付型（全額寄付）、投資型（プロジェクトの利益から配当を受ける）、融資型（出資者は利子を受け取る）、そして、購入型（支援者はお返しとしてモノ、サービス、権利という形での返礼を受ける）の4タイプに分けられる。A-portは「購入型」のサイトの一つである。

日本では2011年6月に開設した「CAMPFIRE」が購入型のプラットフォームとして注目され、市場を牽引してきたと言われる（慎 2012）。CAMPFIREはクリエーターのアイディアを実現するための創作費用を共感した人々から少額で募るプラットフォームで、お金を出した人はその金額に応じて様々な特典（リターン）を得る。慎（同上）によると、たとえば、新しいタイプの車椅子を設計しているWHILLという団体は既存の車椅子に取り付けるだけで時速20 kmまでの走行が可能になるという器具の開発を進めていたが、その資金として50万円をCAMPFIRE経由で募集し、結果的には50万円の2倍となる100万円以上の資金が集まったという。支援者には金額に応じて、WHILLチームからのお礼のメール、製作過程の写真をポストカードにしてプレゼント、プロジェクトの報告会へ招待、東京モーターショウ招待チケット、WHILLの初試乗権プレゼントなど様々なモノと体験が提供された。支援者からは、「かっこいい」「ワクワクする」「車椅子を使う人に夢と希望を与えてくれる」などのコメントも多数寄せられた。クラウドファンディング、特に購入型タイプのものは、慎（同上）が指摘するように、資金提供者は具体的・物質的なモノというよりは体験や感動、そして、つながりという精神的な何かを購入しているとみなすことができるだろう。

Yファームによる、‘津波で流された土地に日本最北のオリーブの森をつくり、農業で地域を再生させたい’という「オリーブの森」プロジェクトは、支援者が53人、集まった資金は目標金額（85万円）の約71%に当たる606,500円であった。購入型クラウドファンディングは、目標金額を達成しなかった場合、プロジェクトが不成立になる「All or Nothing型」と目標金額に到達しなくてもプロジェクトの実施を確約して調達した資金を手にすることのできる「実行確約型」に分けられる。「オリーブの森」プロジェクトの場合は実行確約型を採用している。プロジェクトの起案者であるAさんは次のように記している：「このプロジェクトは実行確約型といたしますので、調達金額に到達しない場合でも（規模は小さくなるかと思いますが）オリーブの森づくりにチャレンジしたい

と思います。何より、サポートしていただける皆様とつながっていけることは、とても夢のあることだと思います」（https://a-port.asahi.com）と。Yファームから支援者へのリターン（返礼）は、支援の金額（1000円から3万円までの5段階）に応じて、活動報告、Yファームの無農薬野菜詰め合わせボックス、Yファームのミニトマトシーズンオーナー、農作業イベント参加、オリーブの木命名権、収穫できた実でつくるオリーブの加工品など、主に新鮮な野菜と農業体験が提供されることになっている。

53人の支援者からは、支援の申し込みの際、「微力ですがわずかな資金でお手伝いできればと思いまして申し込みました。未来の子供たちに農業の素晴らしさを伝えてください」「オリーブの森！想像するだけでとても楽しみです。豊かな森になりますように」「農業をつうじての復興の理念に感動しました。頑張って下さい」「復興への確かな足掛かりとして、このプロジェクトに魅力を感じる。将来的に搾油してオリーブの石鹸をつくることができれば嬉しい」など、プロジェクトへの共感と応援のコメントが寄せられている。慎（同上）が紹介しているWHILLのプロジェクトと同様に、「オリーブの森」プロジェクトでも支援者は少しの金額で、体験、感動、共感、つながり、夢を購入している。プロジェクトの起案者と支援者の間でなされる交換形態に着目してみると、購入型クラウドファンディングにおける交換は、柄谷（2001）のいう「贈与と返礼」、「貨幣による商品交換」などが共存するハイブリッドなものであることがわかる。

**ネットワーク実践としての「オリーブの森」プロジェクト**

クラウドファンディングを活用し、多くの人々から資金と関心、共感を集めることによって相互につながりを作りながら、何かを生み出し、ことを成し遂げていこうとする「オリーブの森」プロジェクトは、先に言及した野火的活動の要素を強く持つ事例とみることができる。このプロジェクトの特徴は、活動をめぐる社会・技術的アレンジメントの中心的な要素としてクラウドファンディングという装置、‘アーキテクチャー’を導入していることである。そのことによって、制度的な組織や地域コミュニティを超えて多くの人々がこの活動に参加し、参加者同士がゆるやかに結びついて何かを生み出すことを可能にしている。ここで言うアーキテクチャーとは、情報技術などを用いた‘環境’設定によって人々に一定の幅での自己決定を促すことを目指すしくみのことであり、環境として物理的空間の布置、あるいは、ある場所を運営するための制度などを含意する（川床2014）。

それでは、「オリーブの森」プロジェクトの活動において、多様なコミュニティや人々はどのようにして制度的な組織や特定のコミュニティを超えて結びついていくのだろうか、また、このような野火的活動における人々のつながりとはどのようなものなのだろうか。ここでは、上野（2011）を参考に、「オブジェクト中心の社会性」（Knorr Cetina, 1997）と「多様な交換形態」（Shiroma & Moro 2011）という側面から「オリーブの森」プロジェクトにおける人々のつながりの形成・維持のあり方をみていく。

従来の社会学は、社会的ネットワークは人々だけからつくられていると考えてきた。しかし、活

動理論やアクターネットワーク理論に依拠する研究では、「オブジェクト中心の社会性」、つまり、社会的ネットワークは共有するオブジェクト（活動の対象）によって結び付けられた人々、モノ、装置から成り立つものと考える。それゆえ、これらの理論では、社会的ネットワークというかわりに、社会 - 物質的（socio-material）、または、社会 - 技術的（socio-technical）ネットワークというタームを用いる。「オリーブの森」プロジェクトは、翻訳すると、“津波被災地にオリーブの森をつくる”というオブジェクトによって結び付けられた人、モノ、装置の社会 - 技術的ネットワーク実践ということになる。しかし、活動を分析する際には、“津波被災地にオリーブの森をつくる”というオブジェクトは、いわば、このネットワーク実践を成立させるための表象的、かつ、象徴的オブジェクトであることに注意しなければならない。実際の活動場面においては活動に参加する人、モノ、装置のあり方に応じて、その都度、（活動の対象としての）オブジェクトは集合的（collective）に形成され、かつ、活動の進展・変化とともに変化する。

「オリーブの森」プロジェクトのようなネットワーク実践を形成し維持していくためには、活動の対象としてのオブジェクトが参加者にとって常に可視的であることが求められる。なぜならば、このネットワークは、前述の通り、共有するオブジェクトによって結び付けられた人、モノ、装置によって維持･形成されるものだからである。2016 年 2 月にスタートした「オリーブの森」プロジェクトはどのようなかたちでオブジェクトの可視化を試みているのか、Y ファームによる支援者に向けたこれまで数ヶ月間の活動報告と支援者とのやりとり、および、フェイスブック（FB）への書き込みを通して具体的に見ることにする。（以下、A さん：Y ファームの代表、N さん：筆者の友人の女性である）

2 月 9 日〈**ご支援感謝します！**〉A さんから支援者 N さんへのメール

N さん、この度は、「津波で流された土地に日本最北のオリーブの森をつくり、農業で地域を再生させたい」プロジェクトをご支援いただきまして、誠にありがとうございます。（中略）気候的には厳しい冬もありますし、風当たりも強い地域での栽培となりますので、チャレンジ的な要素は多いのですが、専門家の指導も受けながら、なんとか成功させたいと考えております。復興に向け息の長いプロジェクトにしていきたいと思いますので、どうぞ、末永く見守って頂きたくお願い申し上げます。

2 月 18 日〈**準備開始！**〉Y ファームの活動報告

東松島は穏やかに晴れております。今日からいよいよオリーブ栽培の現地の面積測定、土壌改良の準備を始めてまいります。Y ファームのご神木のケヤキの元、気持ちのいい空間を作れたらいいなーと想像が膨らみます！

4 月 27 日〈**オリーブ苗届きました！**〉Y ファームの活動報告

福島県いわき市のオリーブ生産者、K さんが直接オリーブ苗を届けに来てくれました！皆今年花

をつけるばかりに生育した苗木、5種類　計百本（写真1）。ファンディング（資金調達）の途中ではありますが、植え付け適期につきゴールデンウィーク中のいずれかの日に植え付けいたします。詳しい日程は決定次第公開いたしますので、来ることができる方は是非ご参加ください！

写真1：いわきから届いたオリーブの苗木

6月12日〈**いよいよ植付けです！**〉Yファームの活動報告

植付け予定の圃場の過湿状態が続いていて植付けが難しい状況が続いておりましたが、ようやく排水の目処がたってきましたので、いよいよ今週末17日金曜日と19日日曜日に植付けをしたいと思います。皆様のご参加をお待ちしております！（尚、面積がそこそこ大きいため、17日は企業ボランティア様の力もお借りして作業を行う予定でおります。）

6月13日　Yファームの活動報告へのNさんのレスポンス

いよいよオリーブの植付けが始まりますね。どのように成長するのか、とても楽しみです。6/17, または、6/19日の植付けに参加してみたいと思っています。詳しい住所をお知らせ頂ければ幸いです（車のナヴィに入れますので）。また、作業に参加する上での注意事項（服装・靴）など、ありましたらお知らせください。農作業は初めてです。

6月14日　AさんからNさんへのレスポンス

Nさん、ご連絡ありがとうございます。17日はあいにく雨の予報になっておりますが、19日は晴れるようですので、予定通り植え付け作業を行います。住所は東松島市牛網字HHXXです。大きなケヤキの木が目印です。当日作業で必要になるのは長靴のみです。道具や手袋はこちらで用意してあります。それほど難しい作業はございませんので、気軽にご参加ください。服装は汚れてもよい服、動きやすい服なら何でも構いません。では、当日お待ちしております。

6月21日〈**植え付け完了。オリーブの森、スタートしました！**〉活動報告

19日の日曜日と今日の2日間で、面積約700㎡に計113本の苗木を植え付けいたしました！住宅跡に山の表土を客土して造成した畑のため、雨の後、過湿状態が続き植え付けのタイミングが難しかったのですが、ようやく、植え付け可能な状態になり、日曜日は本クラウドファンディングの一部支援者の方や地元大学生にも参加いただいて、楽しく植え付け作業を進めることができました（写真2）。今回参加できなかった皆様も、是非、現地に足を運んで、剪定など日常の作業

写真2：オリーブの植付け作業

で実際に樹に触れていただきたいと思っております。植え付けが完了し、ここからが本当のスタートです。生育の状況随時発信いたしますので、どうぞお楽しみに！

6月25日　活動報告へのNさんのリスポンス

113本の苗木、植付け完了のニュースに興奮しました！！私たちがお手伝いしたのは、せいぜい、10本ぐらいでしたが、あれから100本近くも植付けされたのですね。感服しました。これからも折々の生育状況の報告、楽しみにしています。また訪問して、日常の作業を見学（お手伝いもちょっと）させて頂きます。

6月26日　AさんよりNさんへ

Nさん、先日は遠路足をお運び頂きまして、ありがとうございました。お陰さまで、今週末の大雨が降る前に113本の苗木を全て植え切ることが出来ました。あの畑全体がオリーブの樹でいっぱいになりましたよ。(測った様にピッタリでした）！！今後は剪定などの作業をしていきます。また生育を見に来て下さい。

7月16日〈**オリーブが実を付けています！**〉YファームのFBへの書き込み

先日、植樹完了したオリーブがなんと！小さな実を付けています（写真3）！生育は順調という事になりますね♪また、例年より少し遅らせて栽培を始めたミニトマトも少しずつ出荷可能になってきました。これから多品種の野菜達もそれぞれ収穫時期を迎えます。近くに来られた際は是非お立ち寄り頂いて味、風景を楽しんで下さいね！

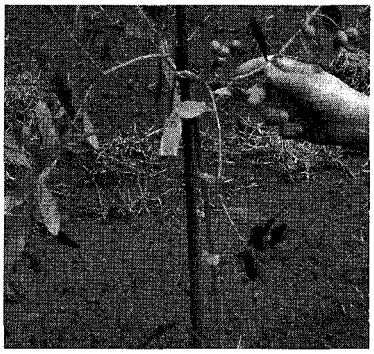

写真3：小さな実を付けたオリーブの木

イイネ　：56件

SKさん　：オリーブ順調そうですね!! すごいです！トマトもおいしそう…!!

Nさん　：オリーブ、水はけの問題が早く解決しますように！トマトのアイコ（品種）さんたち、とってもおいしかったです。

Yファーム：ありがとうございます～、水はけのこと、何回か転圧すれば解消されるのではないかと話しておりました。

8月16日〈**リターン商品発送、遅れます**〉Yファームの活動報告

オリーブは植え付け後の長雨や最近の日照り続きで、厳しい条件にさらされてはおりますが、今のところ順調に生育しております。さて、リターンについてですが、当初の発送予定より遅れてしまい、支援者の皆様には大変ご心配をおかけしております。7月～8月にかけての日照り、高温により、野菜畑の収穫の遅れや、人参が枯れてしまう等、厳しい状態が続いており、新たな井戸掘りや水を運んでの散水等、通常必要のない作業に追われておりましたが、ようやくハウス野菜も合わせて野菜の種類が揃い発送が可能となりました。今週末から順次発送を始めますので、もうしばら

くお待ちください。

8月16日　活動報告へのNさんのレスポンス

久しぶりの活動報告をありがとうございます。作物の栽培にとって気象条件との戦いは折り込み済みのこととはいえ、日照りと長雨というのはちょっと厳しいですね。頑張ってください。ところで、今週末、また農場を訪問して、リターンの野菜を直接現地で頂戴できたらいいなと思っておりますが、いかがでしょうか？オリーブの成長も見たいですし…

8月17日　NさんのメールへのAさんのレスポンス

いつも遠いところ足を運んでいただいてありがとうございます。Nさんさえよろしければ、リターンの‘イベント付き農作業体験’を野菜のお持ち帰りに変更させていただいても構いませんが。週末天気の方が不安ですが、お待ちしております。今月初めにオリーブの間に芝生を張りましたので、前回来られた時とはまた違う景観になっております。どうぞご期待ください。

8月20日〈**雨ニモマケズ風ニモマケズ**〉YファームのFBへの書き込み

先日、植樹したオリーブの苗木ですが、昨日までの大雨や日照りにも負けず、スクスクと育ってくれています。明日からまた台風が接近するという予報ですが、雨ニモマケズ風ニモマケズ！

8月23日〈**台風の爪痕**〉YファームのFBへの書き込み

よつばファームのシンボルが倒木、昨日の台風の爪痕がココに。早速、地域起こし協力隊のKさんに連絡したら直ぐに駆け付けてくれました。オリーブの苗木は数本先折れがありますが大半は無事でした。皆さんの所は大丈夫でしたか？

Yファームの代表、Aさんから支援者に向けた適宜の活動報告によって、はじめは漠然としていたプロジェクトの全体像と見通しが支援者にとっても、また、報告をする側のYファームにとっても少しずつ明確になってきている。例えば、支援者にとっては、一体どんな場所にどのくらいの規模でオリーブを植え付けるのか、オリーブの森とはどんな景観なのだろうか、景観を変えるほどの（オリーブの）森になるにはどのような苦労と積み重ねが必要なのだろうか、農作業の経験のない支援者の場合、どんな場面で作業に参加することができるのだろうか等々、このプロジェクトの目的や意義に共感してはいても、具体的な内容についてはイメージしにくかったのではないかと推測される。起案者のYファームにとっても、2月9日のNさん宛のメールで“冬の寒さや風当たりの強い土地柄からオリーブが生育するか否かについてはチャレンジ的要素が多い”と記しているように、実際に活動をはじめるまでは、どのような場面で、どのような課題が立ち現れるのか予想のつかない状態だったようだ。つまり、オブジェクト（活動の対象）は前もって存在するのではなく、具体的に動きはじめることではじめて課題が生まれ、それを解決するためのオブジェクトが可視化、構成されるということなのである。

また、4月から6月にかけての活動報告によると、4月の末にはオリーブの苗が届いていたにもかかわらず、植付け予定の圃場の水はけが悪くて植付けができず、植付けは6月半ば過ぎまで持ち

越しになったことが明らかにされている。SNSを通したこのような情報の分散と共有によって、支援者もYファームと共に、オリーブの生育プロセスにおいて、今、何が課題であり、何が活動のオブジェクトであるのかを把握する。このようなことによって、初めて、支援者はこのプロジェクトの参加者に成り得るのだと言うことができるのかもしれない。支援者の一人、Nさんは活動報告に接することによって、プロジェクトのスタートとなるオリーブの植付けが圃場の加湿状態の継続によって遅れていること、予定されている土地は水はけがあまり良くないらしいことなどを知る。こうしたことから、Nさんは植付けへの参加の際には恐らく長靴を履く必要があるだろうと予想し、6月13日のメールで、植付け作業への参加と作業の際の履物や服装についてAさんに尋ねている。

Nさんは植付け作業に参加した後、約1ヶ月後にもオリーブの生育状況を知るために再び圃場を訪ねている。その時のことが7月16日のYファームのFBに反映されている。そこでは、圃場の水はけの問題がまだ十分には解決されていないことをNさんは心配している。それに対して、Aさんは、水たまりは何回か転圧すれば解消されるはずだと答えている。このようなかたちで、支援者の一人であるNさんはプロジェクトへの参加を深めている。Yファームの側でも活動の報告をすることで改めて自分たちの活動の課題と解決のためのオブジェクトを再確認し、報告に対する支援者からの反応を得ることで支援者もまたオリーブの生育プロセスに深い関心を持って見守っていることを知る。このことは、8月20, 23日の書き込みのように、FBにオリーブの木の生育状況を記す書き込みが増えていることにも表れている。

**「オリーブの森」プロジェクトへの参加に見る多様な交換形態の発生**

マルクス主義哲学者、柄谷行人は、地理学者のジョエル・ウエインライトとのインタビュー（2014）において、マルクスの「資本論」の根本的な教えは、どんな社会も「交換」に基づいた社会関係によって成立していることを説いたことにあると言う（p.153）。柄谷はこの見解に依拠して四つの交換様式という観点から世界の歴史を再考した。柄谷は、そのことを通して、あらゆる社会構成体はそれら四つの交換様式のヴァリエーション、異なる組み合わせであるという見方を導き出している。四つの交換様式とは：

交換様式A＝互酬（贈与と返礼）
交換様式B＝略奪と再分配（服従と安堵）
交換様式C＝商品交換（貨幣と商品）
交換様式D＝A, B, Cを越えるものとしてのX。

また、柄谷は文学者の佐藤勝とのインタビュー（2014）において、自身の交換様式論は二つの考え方から成り立つことを明らかにしている。一つは、一見交換と見えないもの、たとえば、交換様式B（略奪と再分配）を「交換」と考えたこと、他の一つは、社会的交流、交わり、交通、交易、コミュニケーション、アソシエーション（ドイツ語ではVerker、この英訳はintercourse）は、ある一つの交換的要素のみを含んでいるのではなく、そこには複数の交換様式が混在しているという考え方である（p.9）。つまり、交換様式BといってもAの要素が全面的に消し去られているわけ

ではなくそれらは根底で働いている。また、売買（交換様式C）は昔から口約束や手形といった「信用」でなされてきたが、この信用を支えているのは互酬的（交換A）な義務であるというように、交換様式CにもAの要素があるというのである（p.13）。

ここでは、社会的交流における4つの交換様式の存在、並びに、複数の交換様式の混在という柄谷の観点を参考に、一つの社会構成体である「オリーブの森」プロジェクトではどのような交換が生まれ、人と人とのどのようなつながりが形成・維持されているのかを見ていくことにする。前節で記したように、「オリーブの森」プロジェクトは大勢の人々から資金を集める手法のクラウドファンディングによってスタートしたプロジェクトである。プロジェクトの起案者と支援者との間には（たとえ僅かな金額とは言え）資金（貨幣）とリターン（商品）の交換、つまり、交換様式Cの関係が生まれている。しかし、実際の活動を追跡していくと、この交換形態は起案者と支援者との関係を創出するためのベーシックな枠組みに過ぎず、前節の活動報告をめぐるやりとりに見るように、プロジェクトの進行に伴う両者の交流のなかで、様々な知識、情報、労働、感情、夢や期待が互酬的（A）、再分配的（B）、そして、それらを越えるもの（X）としての要素を含んで交換されていることがわかる。

はじめに、プロジェクトの起案者は必要な資金を得るために自らの顔と名前を出してプロジェクトの詳細、アイディア、夢を語る。支援者はプロジェクトに共感し、期待と応援のメッセージ（前章参照）と共に資金を提供する。支援者は魅力的なリターンを期待してお金を出す場合もあるが、スケジュールの遅れ、天候不順などから何のリターンも得られないというリスクもある。しかし、多くの場合、支援者はそのことを承知の上で、お金を出し、プロジェクトを応援する。起案者は活動報告をインターネットやフェイスブック（FB）を通じてこまめに発信することによって、支援者からの信頼や継続的なサポートを得る。また、起案者は自ら発信した報告に対する支援者の反応から、たとえばどういう層の人々が何を求めているのかなど、ある種のマーケティング的情報を得ることもできる。一方、支援者は起案者からの活動報告に接することによってプロジェクトへの帰属感や活動への参加意識を持つことができる。「オリーブの森」プロジェクトは長期的かつ未知の部分の多いものであるだけに、支援者は、活動報告やFBを通して、また時には現地での作業を通じて、オリーブの成長と天候や土壌との関連を知り、新たな知識や体験にワクワクし、充実感を得ることができる。また、そのことでメンバー同士が情報交換し、オリーブの森を巡って夢を語り合うなど「オリーブの森づくり」コミュニティへの参加を達成することができる。このように、起案者を含む「オリーブの森」プロジェクトの参加者の間には、商品交換に還元することのできない様々な労働、知識、感情の交換、さらには活動集団への帰属性やアイデンティティの感覚の交換などが生まれている。

## 3. コミュニティの形成を可能にする場のデザインと共にデザインされた「オリーブの森」のデザイン

「オリーブの森」プロジェクトが実際にスタートしたのはクラウドファンディングによる資金の調達期間が終了した2016年6月であるが、オリーブの森づくりを構想し、デザインするに至るまでにはおよそ5年の月日を要している。この章では'デザインする'という側面から「オリーブの森」プロジェクトを吟味する。2011年3月の大震災による津波で田畑、農家、小学校、海岸林の殆ど全てを失った東松島市のU地区に、子どもの声、人々の往来、緑豊かな田畑と景観を持つコミュニティを再生させるための一つの拠点として「オリーブの森」は構想されている。このことを踏まえてYファームの活動を追跡すると、「オリーブの森」プロジェクトを実行するための要件、言い換えれば、プロジェクトの実施に必要な社会・技術的環境（人、モノ、装置のアレンジメント）が日常の農業実践のなかで意図的に作られてきたことが見えてくる。

Yファームは2012年11月からフェイスブック（FB）を開いている。そこでは、季節の野菜の植付け作業や収穫の様子、農業付きイベントの開催、ボランティアや中学生の農業体験実習の受け入れ、芝の栽培に代表される新しい事業への挑戦等々、日々の活動が描き出されている。震災によって人もモノも装置（営農の基盤）もなくなってしまった場所に、新たな社会・技術的環境をどのようにして作り出そうとしているのか、或いは、新たに作り出された環境が次の活動とどのような繋がりをもっているのかということが詳細に記録、発信されている。その一部を見てみよう。

2015年2月9日

明日からビニールハウスに電気が供給され、27年度の育苗が始まります。温床も完成し、いよいよナス、ピーマン類の種まきスタート！

2月16日

昨日無事に「羽釜ご飯と冬野菜を囲もう！」イベントを終了しました。ご参加頂いた方は計20名。遠くは埼玉からもお越しいただき、本当に感謝しております。今回は野菜の収穫体験だけでなく、市場出荷の体験ということで、収穫→袋詰め→商品化まで一連の作業をして頂きました。

2月22日

よつばファームの圃場で活動している「みまもり隊」（大学生グループ）のメンバーが人参・ラディッシュを使ったサラダを作ってくれました！新鮮・採れたてだから出来る！自分で収穫したからひと味違う！ また一つ笑顔のひとときでした。

2月28日

昨日に引き続き、さつまいもの寝床を作っています。藁、籾殻、米糠、内城菌（魚粉）を踏み込みながら何層にも重ねていきます。発酵が始まると、40度を越える床暖房になります！菌の力はすごい！

react　　：微生物や菌のお陰で、養分が出来るのですね。何か頼もしい！

Yファーム：食べたいところをグッと堪えて種芋にします。そして、熱〜い風呂に入浴させます！48度の湯に浸けて表面に付いた菌を洗い流すのです。

3月8日

これから始まる新しいいいね！まずは、さつまいも苗作りです♪

react　　：明日お手伝いに行かせていただきますね！友達も誘って行ってもいいでしょうか？

Yファーム：ありがとうございます！はい、ぜひみんなでやりましょう！??

4月13日

本日、新たに2名のスタッフ（研修生）が入社し新体制でスタートしました。Yファームから笑顔をお届けできるよう、皆が集まれる場所、地域になるよう頑張ります。

4月23日

本日、Yファーム27年度のトマトの定植が完了しました。品種は6種類、ハウスは西側の二棟となります。今年度は秘密兵器、その名も！たなたなくん！を導入し、株のコントロールを行い収穫可能時期まで丁寧に管理していきます。

4月28日

“希望の芝プロジェクトinよつばファーム”、始まりました。

今日は、昨日の朝に届いた種芝のカットから始まり圃場に定植？！芝は一度植えると5年は植え替えしなくて良いそうです。S緑化の方に「野菜と違って食べられない物を作る事に抵抗はありませんか？」と聞かれましたが、そこは子を持つ親目線で、「成長する子供たちの笑顔に変わるなら幸せなのでは？」と素直に答えました。何とか、成功させたいものですね。

5月6日

GW中、ボランティアさん達がお手伝いに来て下さいました。畑の土作りから畝立て、マルチがけ、定植or播種と様々な作業を体験していかれました。次はぜひ、収穫時期にいらして下さい！かぼちゃの『坊ちゃん』が綺麗に発芽しました。播種して頂いた他の種も揃ってきましたよ！収穫が楽しみですね！

6月3日

いよいよ、よつばファーム自慢のトマトの最盛期が近づいてきました！今年は、我々でも糖度が確認できるよう秘密兵器を準備し、使用方法をシェアし、出荷に備えております。圃場の方も去年とは多少、風景が変わり楽しみやすい農園になっていますよ！みなさま是非、来て見て感じてみて下さい！

6月18日

石巻水沢種苗店内GS市場にて野菜の販売を開始しました。お近くの方は是非！販促シールなど準備出来ませんでしたが、物でアピールしております！

11月4日

農業に興味を持つ地元中学生が職場体験に来ています！今年は5人。春菊の収穫から出荷までの作業には慣れたようで、昨日より短い時間で作業を終わらせる事が出来ました。最終日は企業ボランティアさん達と行動を共にし、雪菜の圃場の雑草取りやさつまいも掘り、パクチーの種蒔など様々な作業を行いました。どれも初めての体験の子が多く、“疲れた！”の声があがりましたが、最後まで根気良く作業しました。頑張った御褒美に？！トマトを頬張る姿は、やっぱり子供だなぁと感じました。

12月17日

先日の地元中学生による職場体験実習の御礼文が届いていますので紹介します。それぞれ感じ方はあるようですが、仕事・農業＝楽しい。どうしたらお客様に喜んでいただけるか＝笑顔。など、様々な活動から、「楽しい」と「楽しみ」と「達成感」を感じてもらえて良かったと思います。…農業をやってみたい方、農業に興味を持っている方はご相談下さい！

2016年1月28日

最近ご好評いただいている漬物、特に玉ねぎの漬物は家でも評判がよく、浅草では1玉800円？らしいですが、直接買いに来て頂ければ破格の現地価格でお求め頂けます。実はこの漬物や弊社のお米、野菜などのリターンのあるクラウドファンディングが、来月より始まる予定です。目標は日本最北端のオリーブの森をつくること。オリーブの木への命名権もあるちょっと面白いクラウドファンディングです。改めてご案内いたしますので、よろしくお願い致します。

2月4日

被災住宅跡地の活用プログラムのひとつ、樹を増やす事業がクラウドファンディングという形でスタートしました。一緒に被災地の風景・環境を変えていきましょう！

**react**　：朝日新聞2月10日付で〈津波跡地でオリーブ栽培〉の記事を拝見しました。〈北限のオリーブ〉計画が実りますよう…。また現地を訪れて、古民家レストランに寄りたいと思っています。

**Yファーム**：古民家レストランはまだ計画段階で、そこまで到達するには、やらなければならないことがたくさんありますが、必ず実現させたいと思います。オリーブの栽培は、吹きさらしの被災跡地の防風、景観づくり、そして作物としての活用を同時に進めていくプロジェクトです。

こうして、Yファームは、各種野菜の栽培、収穫、販売、加工（漬物にする）の実績を広げつつ、農業体験付きイベントの開催、ボランティアや中学生の農業実習受け入れ、緑化推進プロジェクトとの協働を通じて、芝や雑草の上で転げ回る子どもたち、農業に関心を持つ若者、Yファームが発信する活動に関心を持ち支援する人など大勢の人々を再び被災した土地に呼び寄せることに成功している。この土地に蘇ったのは人々だけではない。ミニトマトに代表されるようにYファームの野菜は品質が良いので直販所でも良く売れる。初年度は1棟だけのビニールハウスが今では2棟、

3棟と増え、その中で赤や黄色のミニトマトがたわわに実っている。また、Yファームは公的機関や企業のプロジェクトに生産者として参加して、被災住宅跡地を使って芝生や野菜苗の栽培にも取り組んでいる。芝生は小学校の校庭を緑の絨毯にし、オリーブの木と木の間にも貼られた。「オリーブの森」は、このような社会・技術的アレンジメント（人、モノ、装置の配置）の形成と共にデザインされているのである。また、こうした社会・技術的アレンジメントの形成と「オリーブの森」のデザインにとって、インターネットやFBなど情報・コミュニケーション技術が重要な役割を担っていることも改めて注目すべき事柄である。

先の抜粋に見るように、Yファームは2016年1月と2月のFBで「オリーブの森づくり」プロジェクトの開始を予告し、FBに参加している人々（FBを見て“いいね！”と反応したり、具体的な感想をよせたり、質問をしたり、或いは、イベントに参加して農作業の体験を楽しむ人々）に支援を呼びかけている。「オリーブの森」のデザインは、このように、様々なモノやことを交換し、その中でコミュニティの形成を可能にする場のデザインとともにデザインされている。

## おわりに

全ての人工物のデザインについて言えることであるが、「オリーブの森」のデザインもまた単体としての“オリーブの森”のデザインではなく、社会・技術的かつ歴史的アレンジメントのデザインであることをここで再確認したい。津波に洗われた土地を作物の栽培が可能な状態に改良し、農作業にボランティアや近隣の若者を動員して農業への関心を形成・維持し、農業の専門家との知識・情報の交換を密にして風土・気候にあった品種を探し求め、独自の工夫を加味して栽培を試みる。作物の出来は予想以上に良かったり、悪かったりする。しかし、Yファームはこうした日々の実践を詳細にFBを通して紹介し、被災地における農業への関心と復興への支援を呼びかける。ここでは、Yファーム、近隣の中・高校・大学生、ボランティア、FBを通じての支援者、被災後農業を離れた近隣の人、農業の専門家、復興事業に参与する公的機関や企業の人との間に知識、労働、情報、感情に関わる様々な交換が生まれている。その意味で、Yファームは震災後約5年の月日をかけて、自らの実践の場を“コミュニティ”の形成が可能な場として再構成していると言うことができるだろう。同時に、そのことによって多様な活動とイベントを新たに企画することが可能になっている。2016年6月に植えたオリーブの苗木が成長し森や林になるまでには今後3年以上の月日が必要だといわれている。「オリーブの森」プロジェクトの活動が進むとともに社会・技術的アレンジメントも形を変えていく。新たなアレンジメントは参加者に新たな期待や夢(エージェンシー)を生み出し、新たな活動の原動力として働くことになるであろう。

**参考文献**

Callon, M. 2004 The role of hybrid communities and socio-technical arrangements in the participatory design. 武蔵工業大学環境情報学部メディアセンタージャーナル　5, pp. 3-10.

Engeström, Y. 2009 Wildfire activities: New patterns of mobility and learning. *International Journal of Mobile and Blended Learning.1,Issue 2.* pp.1-18

現代思想　2014. 総特集＝柄谷行人の思想　現代思想一月臨時増刊号　vol.42-18　青土社
Knorr Cetina, K. 1997.Sociality with objects. Social relations in post-social knowledge societies. *Theory, Culture & Society* 14（4），pp.1-30.
川床靖子　2014.「生きがい」はいかにしてつくられるのか：共同体の内と外との関係の再編　大東文化大学紀要第 52 号 pp. 69-82.
NPO 法人　いわきオリーブプロジェクト　http://iwaki-olive.com
Shiroma, S. & Moro, Y. 2011. Art and network in and around school: Re-organization of community association through traditional art activity. *Paper presented at 3 rd International Society for Culture and Activity Research, Rome, September 8, 2011.*
慎　泰俊　2012. ソーシャルファイナンス革命？世界を変えるお金の集め方　（株）技術評論社
上野直樹　2011. 野火的活動におけるオブジェクト中心の社会性と交換形態　発達心理学研究　第 22 巻、第 4 号、pp. 399-407.
熱海光太郎　2016. 津波で流された土地に日本最北のオリーブの森をつくり、農業で地域を再生させたい. 朝日新聞クラウドファンディングサイト：https://a-port.asahi.com
よつばファーム Facebook 2012-2016 facebook@yotsubafarm.